

水環境を資源として有効に利用するとともに、そこにあるはずの生態系の再生や保全を進めることは喫緊の課題である。しかし、個々の生物とハビタット条件との関連性には未知なる部分が多い。本セッションでは、水環境と水生生物の関係について、8件の貴重な調査結果が報告された。

最初に、水産資源の利用に関わる重要な課題として、高崎らはカキの中腸腺内のノロウイルス量に与える畜養操作の影響について報告し、環境条件と中腸腺内ノロウイルスの関係について討論がなされた。

次に、淡水貝類の生息条件について、大塚らはドブガイが異なる底質条件(礫、砂、泥)で異なる行動をとることを報告し、実環境中での観察結果との比較など今後の検討課題が討論された。穴戸らは農業用水路の水流他の要因が淡水二枚貝シジミの生息を制限していることを報告し、シジミの種類による相違など今後の検討課題が討論された。

魚類については、岩本らは複数の河川の水質、底質、生態の調査結果ならびに魚類調査のための代表的な捕獲法の相違を報告し、定量的データの取得に向けた課題が討論された。木本らは砂州上の一時水域が稚魚の成育に与える影響とその要因を報告し、現場水域の詳細なモニタリングなど今後の課題が討論された。

続いて、干潟植生の影響について、長濱らはコアマモ群落の底生動物(多毛類、甲殻類、二枚貝類)生息促進効果を報告し、環境条件など調査結果に影響する要因の扱いが討論された。矢部らはコアマモあるいはオゴノリが優先する藻場の底質を含む環境条件とその形成要因を報告し、各群落の多様性について討論がなされた。

さらに、ケイ藻類について、林らは水中のSi濃度が河床付着ケイ藻類の増殖や優占種の選択に影響していることを報告し、河川水中のSi濃度条件でケイ藻が受ける影響について討論がなされた。

以上の報告は、水環境中の代表的な生物とハビタットとしての場の条件との関連性を解明しようとした意欲的な研究である。複雑で変則的な環境条件の影響排除が難しい中で、基礎的な研究手法の提案やメカニズムの解明がなされている。これらの成果は、今後の水環境・生物に関連する各種研究の発展に寄与するであろう。本年度の発表者各位の御努力と意義ある成果に敬意を表す。最後に、多くの参加者と共に有意義な討論がなされ、発表者、参加者、会場運営の皆様に御礼申し上げる。

(山梨大学・工 森 一博)